

# 手ぶくろを買いに

新美南吉

寒い冬が北方から、きつねの親子のすんでい  
る森へもやってきました。

ある朝洞穴から子どもものきつねが出ようとし  
ましたが、

「あつ。」

ときけんで、眼をおさえながら母さんきつねの  
ところへころげてきました。

「母ちゃん、眼に何かささった、ぬいてちよう  
だい早く早く。」

といいました。

母さんきつねがびっくりして、あわてふため  
きなながら、眼をおさえている子どもの手をおそ  
るおそるとりのけてみましたが、何もささって  
はいませんでした。母さんきつねは洞穴の入口  
から外へ出てはじめてわけがわかりました。  
昨夜のうちに、まっ白な雪がどっさりふつたの  
です。その雪の上からお陽さまがキラキラと照  
らしていたので、雪はまぶしいほど反射してい  
たのです。雪を知らなかった子どものきつねは、  
あまりつよい反射をうけたので、眼に何かささ  
ったと思っただけでした。

子どものきつねは遊びにいきました。真綿の  
ように柔らかい雪の上をかけまわると、雪の粉  
が、しぶきのようにとびちって小さい虹がすつ  
とうつるのでした。

するととつぜん、うしろで、

「どたどた、ぎーっ。」

とものすごい音おとがして、パン粉こなのような粉雪こなゆきが、  
ふわーっと子こぎつねにおつかぶさつてきました。  
子こぎつねはびっくりして、雪ゆきの中なかにころがるよ  
うにして十メートルも向むこうへにげました。な  
んだらうと思おもつてふりかえつてみましたが何なにも  
いませんでした。それは、もみの枝えだから雪ゆきがな  
だれ落おちたのでした。まだ枝えだと枝えだのあいだから  
白しろい絹糸きぬいとのように雪ゆきがこぼれていました。

まもなく洞穴ほらあなへ帰かえつてきた子こぎつねは、  
「お母かあちゃん、お手て々が冷つめたい、お手て々がちん  
ちんする。」

といつて、ぬれて牡丹色ぼたんいろになった両手りょうてを母かあさん  
狐きつねの前にさしだしました。母かあさんきつねは、そ  
の手に、は——つと息いきをふっかけて、ぬくとい  
母かあさんの手てでやんわり包つつんでやりながら、  
「もうすぐ暖あたたかくなるよ。雪ゆきにさわると、すぐ  
暖あたたかくなるもんだよ。」

といいましたが、かあいい坊ぼうやの手てに霜しも焼やけがで  
きてはかわいいそうだから、夜よるになつたら、町まちま  
でいって、坊ぼうやのお手て々々にあうような毛糸けいとの手て  
袋ぶくろを買かつてやろうと思おもいました。

暗くらい暗くらい夜よるがふろしきのようなかげをひろげ  
て野原のほらや森もりを包つつみにやつてきましたが、雪ゆきはあ  
まり白しろいので、

包つつんでも包つつんでも白しろく浮うかびあがつていました。  
親おや子の銀ぎんぎつねは洞穴ほらあなから出でました。子こども  
の方ほうはお母かあさんのお腹なかの下したへはいりこんで、  
そこからまんまるな眼めをばちばちさせながら、  
あつちやこつちをみながら歩あるいていきました。  
やがて、行手ゆくてにぼつたりあかりが一つひとつみえは  
じめました。それを子こどものきつねがみつけて、  
「母かあちゃん、お星ほしさまは、あんなに低ひくいところ  
にも落おちてるのねえ。」  
とききました。

「あれは、お星さまじやないのよ。」  
と行って、そのとき母さんきつねの足はすくんでしまいました。

「あれは、町の灯なんだよ。」

その町の灯をみたとき、母さんきつねは、あるとき町へお友だちと出かけて行って、とんだめにあつたことを思い出しました。およしなさいっていうのもきかないで、お友だちのきつねが、ある家のあひるをぬすもうとしたので、お百姓にみつかつて、さんざ追いまくられて、命からがらにげたことでした。

「母ちゃん何してんの、早くいこうよ。」

と、子どものきつねがお腹の下からいうのでしたが、母さんきつねはどうしても足がすすまないのでした。そこで、しかたがないので、坊やだけをひとりで町までいかせることになりました。

「坊やお手々を片方お出し。」

とお母さんきつねがいました。その手を、母さんきつねはしばらくにぎっているあいだに、かわいい人間の子どもの手にしてしまいました。坊やのきつねはその手をひろげたりにぎったり、つねってみたり、かいでみたりしました。

「なんだか変だな母ちゃん、これなあに？」  
と行って、雪あかりに、またその、人間の手にかえられてしまった自分の手をしげしげとみつめました。

「それは人間の手よ。いいかい坊や、町へいったらね、たくさん人間の家があるからね、まず表にまるいシャツポの看板のかかっている家をさがすんだよ。それがみつかったらね、トンと戸をたたいて、こんばんはっていうんだよ。そうするとね、中から人間が、すこうし戸を開けるからね、その戸のすきまから、こつち

の手、ほらこの人間の手をさし入れてね、この手にちようどいい手袋ちようだいっていうんだよ。わかったね、けっして、こっちのお手々を出しちやだめよ。」

と母さんきつねはいいきかせました。

「どうして？」

と坊やのきつねはききかえました。

「人間はね、相手がきつねだとわかると、手袋を売ってくれないんだよ、それどころか、つかまえておりの中へ入れちゃうんだよ、人間ってほんとにこわいものなんだよ。」

「ふーん。」

「けっして、こっちの手を出しちやいけないよ、こっちの方、ほら人間の手の方をさしだすんだよ。」

といつて、母さんのきつねは、持ってきた二つの白銅貨を、人間の手の方へにぎらせてやりま

した。

子どものきつねは、町の灯を目あてに、雪あかりの野原をよちよちやっていききました。はじめのうちは一つきりだった灯が二つになり三つになり、はては十にもふえました。きつねの子どもはそれをみて、灯には、星と同じように、赤いのや黄色いのや青いのがあるんだなと思いました。やがて町にはいりましたが通りの家々はもうみんな戸をしめてしまつて、高い窓から暖かそうな光が、道の雪の上に落ちてい

かりでした。

けれど表の看板の上にはたいい小さな電灯がともっていましたので、きつねの子は、それをみながら、帽子屋をさがしていききました。自転車の看板や、眼鏡の看板やそのほかいろんな看板が、あるものは、新しいペンキでえがかれ、あるものは、古い壁のようにはげていまし

だが、町にはじめて出てきた子ぎつねにはそれらのものがいったい何であるかわからないのでした。

とうとう帽子屋がみつかりました。お母さんが道々よく教えてくれた、黒い大きなシルクハットの帽子の看板が、青い電灯に照らされてかかっています。

子ぎつねは教えられた通り、トントんと戸をたたきました。

「こんばんは。」

すると、中では何かことごと音がしています。だがやがて、戸が一寸ほどゴロリとあいて、光の帯が道の白い雪の上に長くのびました。

子ぎつねは、その光がまばゆかったので、めんくらって、まちがった方の手を、——お母さまが出しちやいけないといっってよく聞かせた方の手をすきまからさしこんでしまいました。

「このお手々にちようどいい手袋ください。」  
すると帽子屋さんは、おやおやと思いきつねの手です。きつねの手が手袋をくれというのです。これはきつと木の葉で買いにきたんだなと思われました。そこで、

「先にお金をください。」

といいました。子ぎつねはすなおに、にぎつてきた白銅貨を二つ帽子屋さんにわたしました。

帽子屋さんはそれを人さし指のさきにつけて、カチ合わせてみると、チンチンとよい音がしましたので、これは木の葉じゃない、ほんのお金だと思いましたので、棚から子ども用の毛糸の手袋をとり出してきて子ぎつねの手に持たせてやりました。子ぎつねは、お礼をいってまた、もときた道を帰りはじめました。

「お母さんは、人間はおそろしいものだったおつしやったがちつともおそろしくないや。だつ

てぼくの手をみてでもどうもしなかつたもの。」  
と思ひました。けれど子ぎつねはいったい人間  
なんてどんなものかみたいと思ひました。

ある窓の下を通りかかると、人間の声かして  
いました。何というやさしい、何という美しい、  
何というおっとりした声なんでしょう。

「ねむれ　ねむれ

母の胸に、

ねむれ　ねむれ

母の手に――」

子ぎつねはそのうた声は、きつと人間のお母  
さんの声にちがいないと思ひました。だって、  
子ぎつねがねむるときにも、やっぱり母さんぎ  
つねは、あんなやさしい声でゆすぶってくれる  
からです。

するとこんどは、子ども声かしました。  
「母ちゃん、こんな寒い夜は、森の子ぎつねは

寒い寒いってないでるでしょうね。」

すると母さんの声か、

「森の子ぎつねもお母さんぎつねのおうたをき  
いて、洞穴の中でねむろうとしているでしょう  
ね。さあ坊やも早くねんねしなさい。森の子ぎ  
つねと坊やとどつちが早くねんねするか、きつ  
と坊やの方が早くねんねしますよ。」

それをきくと子ぎつねは急にお母さんが恋  
しくなつて、お母さんぎつねの待つている方へ  
とんでいきました。

お母さんぎつねは、心配しながら、坊やのき  
つねの帰つてくるのを、いまかいまかとふるえ  
ながら待つていましたので、坊やがくると、暖  
かい胸にだきしめてなきたいほどよろこびまし  
た。

二ひきのきつねは森の方へ帰つていきました。  
月が出たので、きつねの毛並みが銀色に光り、

その足<sup>あし</sup>あとには、コバルトのかげがたまりまし  
た。

「母<sup>かあ</sup>ちゃん、人間<sup>にんげん</sup>ってちつともこわかないや。」

「どうして？」

「坊<sup>ぼう</sup>、まちがえてほんとうのお手<sup>て</sup>々<sup>だ</sup>出しちゃつ  
たの。でも帽子<sup>ぼうし</sup>屋さん、つかまえやしなかつた  
もの。ちやんとこない暖<sup>あたた</sup>かい手袋<sup>てぶくろ</sup>くれたも  
の。」

とって手袋<sup>てぶくろ</sup>のはまった両手<sup>りょうて</sup>をパンパンやつて  
みせました。お母<sup>かあ</sup>さんぎつねは、

「まあ！」

とあきれましたが、

「ほんとうに人間<sup>にんげん</sup>はいいものかしら。

ほんとうに人間<sup>にんげん</sup>はいいものかしら。」

とつぶやきました。

### 「手袋を買いに」

※『新装版 新美南吉童話集 1 ごん狐』(2012年12月1日、大日本図書株式会社)の「手袋を買いに」をもとに編集しました。

※このテキストを個人的に読む以外の利用をされる場合には、新美南吉記念館までご連絡ください。  
(TEL: 0569-26-4888)